

細やかなビーズの装飾が施された、
伝統の花嫁衣装。

Republic of the Union of Myanmar

EARTH GALLERY Vol.140 [ミャンマー連邦共和国]

地球ギャラリー
写真・文・沙智(写真家)

息づく日常に 伝統



伝統柄のボトムにモダンなトップ。
洗練された大人の装いだ。



ヤンゴン市内の市場。近郊で穫れた新鮮で豊富な食材がずらりと並び、
早朝から大勢の買い物客でにぎわう。



同じ柄の色違いの布で、
違うデザインに仕立てた二人。



伝統柄の波模様アジエイが施された生地。
波模様にはさまざまなアレンジがある。



丁寧な縫製で凝った装飾もお手のもの。
既製品もサイズを直し身体に合わせてくれる。



通過儀礼の衣装合わせ。
ビルマのお姫様の衣装を着た女の子。



客の希望に応じてデザインしてくれる
街の仕立屋。



お参りして語らい和む癒しの聖地、シュエダゴンパゴダ。

今日はおめでたい得度式^{とくどしき}。儀式を終え、晴れて僧侶となった男性たちが漆塗りの鉢を抱え、本堂から静々と出てきた。列を作って待ち構えていた女性たちが、僧侶一人ひとりにお布施を渡していく。地味な小豆色一色の僧衣をまとう僧侶たちとは対照的に、女性たちは色彩鮮やかな衣装が美しい。肌が透けて見えるオーガージーをあしらったブラウスの若い女性、シャンシルクのロンチーにモダンなデザイン^{*}のブラウスを合わせた女性——お布施をする華やかな女性たちの列は、境内の外まで長く続いている。

女性たちはエンチー(上着)とロンチー(巻きスカート)という伝統衣装をまとうており、その生地やデザインはさまざま、だけれども個性的。どの女性もよく似合っている。それもそのはず、みんな行きつけの仕立屋、テイラーに仕立ててもらったものなのだ。ミャンマーではおしゃれも仕事着も、ちよっとした服はすべてなじみの「マイテイラー」にデザインして仕立ててもらおう。彼女たちが「マイテイラーが……」と言うとき、自分が美しくしてくれるテイラーを誇る気持ちが感じられる。街を行く女性たちはみんな体にぴったりの服でしなやかだ。サイズだけでなく、自分が着たいと思うデザインの服を身につけるのは日常のこと。日頃服に体を合わせている私にはなんともうらやましく映る。服の素材となる布も

美しく多彩だ。多民族国家のミャンマーは、その土地その土地に特有の織物がある。ミャンマーは古くからの織物の国。世界でまだ綿織物が希少だった時代から綿栽培と織物の技術を持ち、養蚕と絹織物の技術も発達した織物先進国だ。遅くとも4世紀には綿織物の輸出で栄えた王国があったことが知られている。一方日本で薄い綿織物が一般に知られるようになるのは、朱印船時代(16世紀末〜17世紀初頭)になってから。インドや南蛮渡来の絹のような光沢をもつ洒落た柄の綿織物は、趣味人たちの憧れの的となった。当時の国産綿織物は糸が太く厚手のやぼったいものだったからだ。養蚕と絹織物の技術が確立するのは18世紀末。それまでは、ほとんど中国を介して東南アジアやインドからの輸入に頼っていた。着物の柄がミャンマーの男性のロンチーの柄と似ているのも、女性のロンチーの柄が振り袖の古典柄や帯の柄を連想させるのも、遠い昔、ミャンマーで織られたものが日本に入ってきたからかもしれない。近年ミャンマーでは、日本の着物の生地で作るロンチーを作るのがはやっていて、興味深く思えてくる。ロンチーメーカーの、「樹齢百年の綿の木から採った綿糸で織ったロンチー」という売り文句も、綿織物の歴史の長さを象徴しているのだろう。

ミャンマーの織物産業は、その高い技術にもかかわらず低コストという点で近年外国企業から注目されている。ミャンマーの産業界にとつて国外市場への参入は魅力的だが、その陰では、国内向け商品の質の低下と価格上昇が懸念されている。隣国タイでは20〜30年前まで、日本では50〜60年前まで、仕事着やおしゃれは仕立屋であつたのが普通だった。大量生産による低価格化やグローバル化によって街の仕立屋の数は激減し、個人が服をあつらえることは特別なこととなつて、庶民には手の届きにくいものになつていった。やがてはミャンマーもそうなることは避けられないのだろうか。ヤンゴンの聖地シュエダゴンパゴダでは、若い男女が二人でお参りする姿を多く目にする。ここは、伝統的なデートスポットでもある。聖地だから、みんなきちんとした装いで訪れる。もちろん女性たちの服はマイテイラーが仕立てたもの。男性のロンチーと色彩を合わせて、カップルでさりげなくおしゃれを楽しんでいるのが素敵だ。この豊かな文化が、あの恋人たちの子どもたちの世代にも変わらず受け継がれていることを願う。

*ミャンマー東部のシャン高原(シャン州)をおもな居住地とする民族の一つ。



左：ヤンゴンのダウンタウンとヤンゴン川。右：ミャンマー伝統の喫茶店ラペイエサインは、暮らしに欠かせない憩いの場所。



沙智(さち)
写真家。東南アジアの農業経済を学んだのちタイの大学に留学し、写真芸術を学ぶ。1995年よりバンコクを拠点として、アジア諸国の「食」と「暮らし」の撮影を開始。アジア各地をユニークな視点で取材し、月刊誌や機内誌に発表し続けている。著書に『ヤンゴンの休日 黄金郷のスローライフ』(書肆侃侃楼)、『アジアンスイーツ』(柴田書店)、『タイ料理の教科書 現地のおうちで再現!』(学研プラス)など。